

『ライフサポーター KAI-GO! シリーズ』第4回 ある有名人の場合 阿川佐和子さん

ダイバーシティ推進委員会 委員長 原 繭子

今月で第4回目となりました、「ライフサポーター KAI-GO!」。この企画は、「介護」について、家族や職場で話題にすることが『朝起きたらトイレに行くくらい当たり前』と思えるような日常を目指して、会員・準会員の皆様に話題を提供する企画です。では今回も始めてまいります。

さて、今回で4回目の執筆なのですが、今もこの記事執筆しながら私の心の耳には、「介護といっても、具体的にどのようなものなのかイメージできないです。」そんな声も聞こえてくるような気がします。

そのような思いを少しずつ解消する行動の1つとして、他の経験者は家族をどのように介護してきたか、つまり、他の方の実際の事例を学ぶことがあげられると思います。

私も経験者の友人達にいろいろ話を聞かせてもらいましたが、介護はひとりひとり事情が異なるので、全く一緒のケースはありません。また自分で聞かせてもらえる経験談は、数に限りがあるでしょう。さらには、「介護」にはプライベート色が高いと思うために、親しい友人に対してもなかなか話を聞きにくいと思っている方もいらっしゃると思います。

そこで今回は、「介護ってどんなこと?」と思っている初心者の方にも手に取りやすい書籍として、著名な方がご自身のご両親の介護についてお話している書籍の中から、今回はこちらの1冊を選んでみました。

「見る力 アガワ流介護入門」

著者 阿川佐和子 大塚宣夫
株式会社文藝春秋
2018年6月20日発行

著者のおひとりとしてクレジットされている阿川佐和子さんはご存じの方も多いと思いますが、作家の故阿川弘之さんの長女です。エッセイスト、タレントとしてご活躍で「たけしのTVタックル」では20年以上司会を務めておられます。もうおひとりの著者である大塚宣夫さんは精神科の医師であり、慶応義塾大学医学部を卒業後、11年ほど精神科の勤務医を務められた後、「自分の親を安心して預けられる施設を作る」という目標をもって、1980年に青梅慶友病院（現在736床）、2005年によりみうりランド慶友病院（240床）という高齢者を対象にした病院を立ち上げ、現在は医療法人社団慶成会会長に就任されています。このお二人は、阿川佐和子さんのお父様である

阿川弘之さんが、2012年に自宅で転倒したことがきっかけでよみうりランド慶友病院に入院されたというご関係です。

書籍の内容は、上記の関係のお二人が、よみうりランド慶友病院及びご自宅で阿川弘之さんが過ごす日々の様子とご家族や病院の取り組みについて、それぞれ当事者である阿川佐和子さんと大塚宣夫会長が当時を振り返りながら対話をしている、という構成になっています。「豊かな最晩年の実現」という方針に基づき独自色あるサービスや施設について、お父様が利用した様子と共に紹介されています。また、阿川佐和子さんの質問力や話題展開力のおかげで、例えば、「もし俺が老人ホームに入ることになったら、自殺してやる!」というほどのワガママなお父様をなんとかして入院させたら、病院とは思えないほど食事が美味しい上に、「食べたいものを食べてよい」という病院だったので、ワガママなお父様もすっかり気に入ってホッとしたという旨のエピソードは、作家の娘の日頃からのご苦労がうかがえます。

そして、大塚医師のご発言では、知識としては人は誰でも年を取り間

違いなく死ぬとわかっている、自分が後期高齢者の仲間入りをすることはなかなか考えられないが、記憶がすっぱり抜け落ちるような衝撃的な体験をしたおかげで、とうとう自分事として考えざるを得なくなってきたというくだりには、身につまされる気持ちになりました。

実際に読んでみると、こちらの病院では、利用料が高額であることが垣間見れます。それはそれとして、人間の体が年齢と共に変化するにつれ、家族はどのように接していくのか、また本人はどのような思いをし

ているのかについて、推測する手助けになってくれる書籍であると思いました。

お父様だけでなく、認知症のお母様や大塚医師までも含めた、高齢者の気持ちのうつり変わり、それによりそう家族の心持ちについても、細やかに表現されています。もし気持ちの持ち方ひとつで自分の目の前が明るくなる

のであれば、それも生きていく知恵の一つかもしれません。この記事が、ご自身にとってさらに必要なことを考えるきっかけになれば幸いです。



記事をお読みいただきましたご感想や企画記事のご提案等をお聞かせいただければ幸いです。どんなことでも結構ですので、ぜひご感想等お寄せください。

感想はこちらから ▶▶▶▶▶

